

Paul Valéry / André Fontainas, *Correspondance 1893-1945*
édition établie par Anna Lo Giudice, Editions du Félin, 2002.

森 本 淳 生

みずからが伝記的事実をほとんど評価せず、いわゆる「純粹自我」を称揚したためかは分からぬが、ポール・ヴァレリーを対象とする研究は、作品を扱うにせよ、『カイエ』を読み解くにせよ、さまざまな社会的関係を生きる生身のヴァレリーの姿に、あまり大きな関心を払ってこなかった。たしかに、『カイエ』を思想的に読解する場合には、伝記的事実を参照する必要はあまりないし、それを過度に参照することは、思想を性急に実存的次元に還元することにもなりかねない。しかし他方で、ヴァレリーの数少ない伝記（Denis Bertholet, *Paul Valéry*, Plon, 1995）の書評のなかで清水徹氏も述べているように（『ヴァレリー研究』第1号、日本ヴァレリー研究センター、1999）、20年代以降のヴァレリーは多くの社交界に出入りして華々しく活躍しており、こうした活動は彼を考えるうえで本質的な重要さをもつものでもある。狭義の文学や思想とは別の次元において、さまざまな貴婦人のサロンをも含む作家たちのコメディール・リテールのありようを具体的かつ理論的に考察していく必要もあるのである。

とはいえ、ヴァレリーの伝記的事実を知るための具体的な資料が、これまで十分に公開されてきたとは言えない。長い間、ジッドおよびフルマンとの往復書簡集と、著名人への手紙を収めた『ある人々への手紙』とが主要なものであった。ただ近年では、ミシュリーヌ・オントベリーによるアンドレ・ルペーとの往復書簡にかんする研究が公開されたり（*Bulletin des études valéryennes*, n° 85, juin 2000）、ヴァレリー、ジッド、ピエール・ルイス三者間の往復書簡集やアンドレ・ルペーとの往復書簡集がガリマール社から近刊されるとの情報もあり、研究をめぐる状況は次第に変化しつつある。

ここで取りあげるアンドレ・フォンテーナスとの往復書簡集の出版も、そうした動向の一端を示すものと考えてよいだろう。編者のアンナ・ロ＝ジューディチュは、本書掲載の履歴によれば、ローマはラ＝サピエンツァ大学のポール・ヴァレリー研究資料センターを中心となって運営しているフランス文学者であり、マラルメ、ヴァレリーなどの象徴主義作家やアヴァンギャルド運動を専門としているが、イタリアや英米の文学、映画などにも詳しい。筆者も、2002年に韓国でコロックが行われたさいに、お会いする機会を得た。

本書に収められた手紙はすでに『ある人々への手紙』に収録されている4通や、他のかたちで公開されたもの（p. 222-223, 320-321）を含んでいるが、その大部分は未刊資料である。1895年10月22日から1918年10月7日までの49通分のヴァレリーの書簡は、不如意であったフォンテーナスによって売られてしまい、1通をのぞき現在も所在不明であるが、フォンテーナスは売却

前に写しを取っていた。オリジナルと写しの双方が残っている1通 (p. 102-103) から判断すると、必ずしも完全な写しではないが、それでも内容の概略は知ることができる。

アンドレ・フォンテーナス (1865-1948) は、ベルギー生まれのフランス人で、象徴派に属する詩人であった。彼が通ったのはパリのリセ・フォンターヌ (1874-83年の名称、その前後は「リセ・コンドルセ」となる (菅野昭正『ステファヌ・マラルメ』中央公論社, 1985, p. 471)) で、級友にはルネ・ギルなどがおり、英語教師はマラルメだった。この時代からフォンテーナスはホメロス、ウェルギリウス、ユゴー、シェリー、スウィンバーン、ヴェルレーヌ、ラフォルクなどを耽読する文学青年だったらしい。パリでリセを終えた彼は、しかし大学時代はブリュッセルで過しており、そこでいくつかの文学雑誌にかかわったり、メーテルランクなどベルギーの作家たちと親交をむすぶことになる。

ヴァレリーとフォンテーナスが出会った正確な時期は不明である。フォンテーナスが大学を卒業したのちにパリに戻ってきたのが1889年、その約1年ほどまえにはローデンバックがパリに移住し、また90年4月にはアルベール・モッケルもフォンテーナスたちと合流している。いわば、ベルギー出身の作家たちの一種のコロニーがパリに出来上がりつつあった。フォンテーナスは詩人アンドレ・フェルディナン・エロルドの妹ガブリエルと結婚し、エロルドの母が主宰するサロンを通じてパリの知識人社会に入っていく。他方で、パリに移住した89年にブリュッセルで刊行された詩集『花々の血』*Le Sang des fleurs* はマラルメからも賞賛されることとなり、エレディアやマラルメのサロンに受け入れられることになる。ヴァレリーの方はといえば、ピエール・ルイスにはじめて会ったのが1890年5月、以後手紙のやりとりを経て、ローマ街のマラルメを初めて訪問したのが91年10月10日である。このころにフォンテーナスとの出会いがなされたかは不明だが、いずれにせよ現在残存している最初の手紙は93年9月21日付けのフォンテーナス宛のものである。ヴァレリーがパリに定住するようになるのは、その少し後、翌年3月のことであった。

このような熱心な文学青年の交流から生まれたのが、本書に収められた往復書簡である。パリにいれば近く会う約束をし、ついでに簡単に近況を述べあう。ヴァカンスなどで遠方に離れたときは、少し詳しく身辺雑事を報告する。そうした日常生活と周囲の文学環境のできごととが、この書簡集の基底をなしていると言えるだろう。

95年10月のフォンテーナスの息子の死産は、大きな私的できごととして語られる最初のものだが、そのほかにも、96年4月にヴァレリーがチャータード・カンパニー関連の仕事のためロンドンにいたときの様子や、ヴァレリーの結婚前後の状況などが書簡からはうかがえる。ヴァレリーは新婚旅行でベルギーに行くにあたって、宿泊するホテルの情報をフォンテーナスに求めており、フォンテーナスも知っていることを丁寧に書き送った (p. 149-150)。ヴァレリーの結婚後も二人のつきあいは親密であった。ヴァレリーはフォンテーナスの息子フェルディナンの病気を感動的な文体で強く憂っているし (p. 162-163)、1911年に彼が死んだときは、その遺稿集を読んで早熟さに感心し、子供としてしか見ていなかったことを悔やんでいる。「彼がこんなにも親密に私たちのそばにいたことを私は知りませんでした……」 (p. 180)。フォンテーナスの方も、病

弱だったヴァレリーの妻を心配する言葉を書き送っている (p. 173, etc.)。もちろん明るいニュースもある。1903年に長男クロードが生まれたとき、ヴァレリーは誕生をその日のうちにフォンテーナスに伝えているし (p. 163), のちの1916年には半年とあけずにそれぞれに子供が生まれたことを喜びあってもいるのである (p. 214-215)。

しかし私事にわたる最大の事件は、1914年2月から3月にかけて、フォンテーナスが妻ガブリエルと離婚するにあたり、財産分与にかんする調停の役をヴァレリーが引き受けたことだろう (p. 182-196)。決して裕福でなかったフォンテーナスは、ガブリエルとその弁護士の財産分与の要求を前にして、さまざまな調整をヴァレリーに頼んでおり、この役はかなり困難なものであったと推察されるが、こうした労をとるあたりからも、ヴァレリーのフォンテーナスに対する友情の深さを感じられる。フォンテーナスは翌年、画家のマルグリット・ワラルと再婚する。

目を外に転じれば、文学史の逸話の類にもこと欠かない。95年10月のマリー・ド・エレディアとアンリ・ド・レニエの結婚式の模様を、フォンテーナスは冷やかな距離を取りながらジェノヴァにいたヴァレリーに書き送っている (p. 70-73. 余談だが、レニエはマリーを好きだとルイスに相談されながらルイスを出し抜いてマリーと結婚した。しかし、マリーとルイスは97年には愛人関係となる……)。また翌年ルイスが、『アフロディテ』の成功を背景に『メルキュール・ド・フランス』編集部内での影響力を増そうとしてヴィエレグリファンらと不和になる様子などもうかうことができる (p. 109)。97年3月2日の「ラ＝ジュネス／モークレール事件」は、ジャリが冗談でピストルの空砲をクリスチアン・ベックの胸に発砲したさいに、モークレールが一番臆病なやつがここから出ていくことにしようと言ってラ＝ジュネスを侮辱したため、両人の決闘まがいの喧嘩に発展した事件だが (p. 107), こうしたところからは当時のサンボリストたちの雰囲気を感じとることができるだろう。

また、1920年には、ヴァレリーの有名な序文がついたリュシアン・ファーブルの『女神の認識』をめぐる、ファーブルが『メルキュール』誌に掲載されたフォンテーナスの批評に強い不満をもち、ヴァレリーとの関係をほのめかして、批評の修正を要求する手紙を書いたらしい。ヴァレリーと自分の友情の方が強いと理解していたフォンテーナスは、この若い作家の所行を批判的にヴァレリーに書き送っている (p. 244-247)。

とはいえ、本書はこうした外面的な逸話に終始しているわけではない。本書の重要な一部をなすのは、フォンテーナスによるヴァレリーの作品評である。『ダ・ヴィンチの方法序説』(p. 67), 『ドイツ的制覇』(p. 209-211), 『若きパルク』(p. 219-221), 『覚書と余談』(p. 236-237), 『蛇の素描』(p. 269-271), 『ウーバリノス』, 『魂と舞踊』(p. 284-285) などヴァレリーの多くの作品について、フォンテーナスは感想を書き送っている。例えば、『若きパルク』については、これがラシーヌに比すことのできる古典主義的作品であると評価し、ただし筋がはっきりしないので普通の読者は理解が困難だとつけ加えている。長い沈黙を破って作品を発表したヴァレリーはこの批評を喜んだ。「というのも、あなたは作家という仕事がなにかご存じだからです」とヴァレリーは礼状に書いている (p. 222. ちなみにこの手紙は『若きパルク』について述べたものとしてすでによく知られたものである)。また、『蛇の素描』にかんしては、その価値を認めながらも、

形式面の不整合や、拍子に安易な所がある点、またオードにしては蛇にアイロニカルな調子があることなどを批判した。ヴァレリーは、この詩がもともと1915年にルイスを挑発する (agacer) ために書かれたバラードであったと明かし、それをオードに巧く改作できなかったのだと返答している (p. 271-272)。こうしたヴァレリーについての批評の他にも、1926年のNRF特集号にのったマラルメの「エロディアッド古序曲」にかんして、このテキストにはマラルメ的な統御のきいた推敲の筆が入っていない、このままでは決して発表されることはなかったはずだと批評している点なども興味深い (p. 311)。総じてフォンテーナスが自分の文学観を述べ、ヴァレリーは聞き役という印象は否めないが、この往復書簡が高度な文学論議の場であったことは確かであろう。

本書からは、二人が困ったさいに助け合う様子もうかがうことができる。1915年9月、『ドイツの制覇』が『メルキュール』誌に再録されたが、掲載にいたるまでには5月頃からやりとりがあった。ヴァレリーは本文に掲載されるのを望み、ヴァリエテ欄に載ることを嫌っていたので、この点にかんして編集のヴァレットとの仲介をフォンテーナスに頼むことになった (p. 201-207. 実際に本文部分に掲載された)。1917年には、ヴィユ＝コロンビエ座でポーについて講演する話があった模様であるが、準備にあたってヴァレリーはフォンテーナスに資料の貸与を頼み、19年に刊行されるフォンテーナスの『エドガー＝アラン・ポーの生涯』の草稿も読ませてもらっている (p. 217-218, 225-227)。また27年にはヴェラーレンについて話すにあたり、資料の貸与をフォンテーナスに頼んでもいる (p. 314)。

しかし、20年代以降、ヴァレリーの名声が確立すると、フォンテーナスが助力を求める場面が多くなっていく。20年の歳末にフォンテーナスは『グラジオラスの小径』*Allée des glaïeuls*として出版されることになる6つのオードを手紙でヴァレリーに書き送っているが、この詩集の記事をNRFに掲載してくれるよう頼んでいる (ヴァレリーはリヴィエールやジッドに遠慮するように言われ実現しなかった模様)。この他にも、フォンテーナスの関係する企画のさまざまな委員に名前を連ねること、アカデミーなどの団体による出版助成や講演・ラジオ番組出演への口添え、注文原稿の紹介、奨学金や文学賞の候補の推薦にあたっての協力要請など、多岐にわたる問題でフォンテーナスは援助を求めていく。ヴァレリーも、生活が楽ではなかったこの友人のために奔走し、そのおかげもあって晩年のフォンテーナスはラセール賞やアカデミーの賞、あるいはレジオンドヌール勲章などを獲得することができた。このあたりは、「純粹詩」の信奉者たちの舞台裏であろう。

かつては頻繁に行き来したふたりも、晩年は多忙や健康状態の悪化から、ほとんど会う機会がなかったようである (p. 342, 352, etc.)。50年以上にわたって続いたふたりの交流は、1945年7月20日のヴァレリーの死によって断絶することになった。同日、フォンテーナスはヴァレリーの妻にこのように書いている。「まったく茫然としています。彼は誰よりも偉大で輝いていました——しかも私より何歳も年下なのです。何も書くことができません、お許し下さい」 (p. 358-359)。

本書の価値はなによりもその資料性にある。他の往復書簡集と同じく、本書も作品の読解だけからはうかがえない、文学事象の裏面を明らかにすることに役立つだろう。その一端は本稿で紹介

介したとおりである。以下ではより具体的に、ヴァレリー研究にかんして明らかになった点を、筆者の観点から二つだけ挙げておきたい。

ひとつは、若きヴァレリーが文学理論を集約的に開陳した未完のテキスト『マラルメ試論』*Essai sur Mallarmé*の執筆状況にかかわるものである。1897年3月23日、アルベール・モッケルはマラルメを私淑する詩人たちとはかり、敬愛する師の55歳の誕生日を記念して彼らの詩や散文をあつめた一卷を献呈した。『モッケルの巻物』*Rouleau-Mockel*と呼ばれるこの書物に参加したのは、ジッド、レニエ、ルイス、クロードル、フォンテーナス、デュジャルダン、ヴェラーレン、ローデンバック、ヴィエレ＝グリッファンなど23名であった。ヴァレリーも詩篇「ヴァルヴァン」を書いて、この企画に参加している。『マラルメ試論』は当初、『モッケルの巻物』に掲載するために構想されたものと考えられる。モンペリエで書かれた97年3月9日付けのフォンテーナス宛の書簡のなかで、ヴァレリーは次のように書いている。「ステファヌ〔・マラルメ〕については一行も書けてません、私を熱狂させないから。そこで、力を節約するために、たくさんは書かなかったのです。でも言うべきことはある、なんてことでしょう！それは文学的言語について考えさせます——しかし私は、自分の偏執のひとつのおかげで、それを実際に実践することをとてつもなく難しくしてしまったのです。それはきわめて実践的な事柄なのですが。ああ！金よ！／結局、次のことをしなければなりません。（1）ひとつの心理＝統辞論的理論をまるごと示すこと、ただしこれにはちょっとした不都合があります。つまりそれはステファヌ・マラルメに〔直接は〕関係ない。でも、これがまた面白い点でもあるのですが。この理論は短くして、その結果だけを用いなければならない。したがって、それは消えてしまうのです。／（2）この理論を通して、ステファヌ・マラルメを提示しなければならない。（3）十分に短くしなければならない。／こうしたことはみな、とても複雑です」（p. 105）。詩篇「ヴァルヴァン」が、『マラルメ試論』とともに送られるものと考えられていたのか、それとも『試論』のかわりに書かれたものなのかは定かではないが、いずれにせよ『試論』は発表されることがなかった。『モッケルの巻物』や「ヴァルヴァン」については従来より知られていたことであるが、『マラルメ試論』にかんする知識は（筆者の知るかぎり）本書が第一次的資料となるはずである（邦訳『ジッド＝ヴァレリー往復書簡』（第2巻、二宮正之訳・註、筑摩書房、1986）は、97年3月15日モンペリエ消印のヴァレリーの手紙にある「二枚だけ」書かれた『マラルメ』を「ヴァルヴァン」のことであるかのように註しているが、問題があろう。なお『マラルメ試論』は拙訳で近刊予定である）。

第二に挙げておきたいのはマルクスの『資本論』にかかわる点である。これまでのヴァレリー研究では、「昨晚（少し……）『資本論』を読み返した！！」と書かれた1918年5月11日付けとされるジッド宛の書簡が注目を集めてきたが、（筆者の知るかぎり）では一体いつ最初に読んだのかは不明のままであった。しかし、98年2月1日のフォンテーナス宛書簡には次のようにある。「最近是他にも心をとらえる読書で忙しい。例えば『資本論』を読みました〔……〕」（p. 121）。マルクスは「とても注目すべき男だが、仲間たちと同じです、つまり何も証明しなかった。この点は前から確信していました——でも今では彼を評価することができます。彼は馬鹿じゃない。彼は経済学の諸問題を解くために、私が自分の探究の最初に心理学的諸問題のために用いたのと

同じ道具に頼っています、これは面白かった。／この道具がとても貴重なものであるのは本当ですが、私はとりあえずのところそれを放棄しました。より正確なものにしてそこに立ち戻るために」(p. 122)。ここで言われている道具とは、心理事象を変換のプロセスとみるヴァレリーの「システム」のことであり、ヴァレリーは、経済事象をまず交換の諸形態として考察する『資本論』の価値形態論に、おそらく自分の方法と同質のものを見出したはずである。興味深いのは、そうした方法が、98年の段階でより正確を期すために放棄されたと言明されている点である。それと符合するかのように、同じ手紙では『アガート』の執筆が語られている。『アガート』とは、眠る人間の内面の探究であり、覚醒時の知性の生成のプロセスの考察である。おそらく98年初頭のヴァレリーは、数学をモデルにした「システム」の方法論から、そうした方法自体の可能性と生成の問題へと関心を移していたと考えられるのである（なお蛇足ながら、『アガート』がモンペリエの雑誌『祝杯』*La Coupe*のために書き始められたものであることも、この書簡からはじめて分かったことだと思われる）。

このように、伝記的事実や文壇事情だけにかぎらず、ヴァレリーの思想的展開を理解するうえでも、本書の重要性は看過することができない。ヴァレリー理解に新たな光をあてるためにも、近刊とされているルイスやルベールとの書簡集とあわせて、書簡資料の詳細な読み合わせの作業が今後も必要不可欠となるだろう。その意味で、本書は無視しえない一歩を印しているのである。